

課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学籍番号 16DC1609
氏名（本籍） 呉 杰華（中国）
学位の種類 博士（中国研究）
報告番号 甲 第 127 号
学位授与年月日 2023（令和5）年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
論文題目 明清近代景德镇の陶瓷生产与自然生态

審査委員
主査 黄 英哲
副査 松岡 正子
副査 三好 章



2023（令和5）年2月14日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

題目:明清近代景德镇的陶瓷生产与自然生态

【審査結果】

呉傑華の博士学位請求論文について、博士学位授与を相当とする。

【審査要旨】

本博士論文は明清近代における景德镇の陶磁器生産と自然生態をめぐり、八十年代の中国歴史学界から始まった環境史という歴史学概念から中国の歴史を新たに整理することで、歴史の多様化の面を探り、従来の政治史、経済史、文化史、軍事史等の伝統的な面から脱することを試みている。本論は環境史を中心とする観点で展開する。環境史を主軸として、時間設定は秦漢から 1949 年以後までかなり長期にわたるが、主要期間は明清の近代とし、地域設定は古代の浮梁及び景德镇とほぼ重なる、現在の景德镇市珠山区、昌江区、浮梁県を中心に、論述の過程で周辺の都昌、余干、鄱陽、祁門、星子、樂平、南昌等の地も研究の対象範囲としている。

1.本博士論文の内容

本論は緒論と結論を除く全九章からなる。第一章「景德镇陶瓷史及其生产网络(景德镇の陶磁器生産史及びその生産ネットワーク)」では、景德镇陶磁器生産史及びその生産ネットワークについて論じる。第二章「矿产开采、地方纠纷与地区环境(鉱産物採掘、地方紛争と地区環境)」では、数百年間にわたる景德镇の陶磁器生産過程における社会的作用と環境への影響について詳述する。第三章「瓷器生产与燃料供应(磁器生産と燃料供給)」では、景德镇の燃料発展の過程で、槎窯から柴窯を主とする変化を経た。これは実質の燃料改革であり、本章は景德镇の燃料市場のこれまでの変化を中心に簡潔に論じる。第四章「燃料消耗与地区环境(燃料消耗と地区環境)」では、景德镇の磁器生産において燃料は不可欠であり、発展繁栄し続ける磁器業界の背後で大量に燃料が消耗された。こうして消耗された燃料は当初は地元には依っていたが、時間の経過とともに地元の燃料では足りなくなり、燃料の供給地は周辺地域に広がった。これにより燃料コストは増加した。本章では近代に景德镇磁器が外国の磁器との競争に負けた原因と、空気汚染・火災のリスクの問題を検討している。第五章「民国时期的景德镇林场(民国時期の景德镇の造林地)」では、民国の不穏な時期の景德镇における燃料栽培としての造林地の状況を詳しくまとめている。第六章「近代景德镇瓷业危机与燃料改革(近代景德镇磁器業の危機と燃料改革)」では、主に近代に景德镇が日増

しに衰退していった多くの原因について探究している。中でも窯と燃料が重要な要因であり、窯と燃料の改革は民国には成功せず、景德鎮の退勢を覆すことができないまでにはならなかったと指摘している。第七章「陶瓷生产与景德镇的水环境(陶磁器生産と景德鎮の水環境)」では、水は陶磁器生産には不可欠であり、水路が近代及びそれ以前の景德鎮の主要な運輸方法であった。水は陶磁器を生産する主要原料の一つであり、景德鎮陶磁器生産にとっての動力でもあり、景德鎮陶磁器生産のすべてに影響する。本章では水資源と景德鎮陶磁器発展の要素について検討している。第八章「景德鎮是中国古代手工业重镇(景德鎮は中国古代手工業の重鎮)」では、この地に集まる生産者の数は多く、今までの研究者もこれらの人々に注目はしていたが、関心の多くは景德鎮磁器業界の組織内の派閥や派閥闘争についてであり、陶工の具体的な仕事や生活状況に関心を示すことは少なかった。本章では陶工の仕事や生活状況について具体的に整理している。第九章「景德鎮的工人群体、社会环境及疾病(景德鎮の陶工グループ、社会環境と疾病)」では、第八章に続き、さらに陶工の社会環境と疾病について具体的かつ詳細に述べている。結論では、景德鎮の没落原因について非常にすばらしい指摘をしている。一つ目は、地元資源が枯渇して、大量の磁器業資源を迅速に景德鎮に運び入れることができるようにするには、外地からの素早い輸送に頼らねばならなかったが、景德鎮への輸送は実際には不便で、頼みの昌江は大きな川とは言えず、漢水、贛江、湘江等とはとても比べものにならない。さらに枯水季節には船を航行することもできない。国際的な磁器の都が頼るのはこのような運搬方法であり、結果は推して知るべしであった。近代に西洋の鉄道が中国に導入されても、景德鎮には鉄道がなく依然として昌江の水運に頼っており、その運命は容易に想像がつくというものである。二つ目に、遠距離輸送で実際には景德鎮の磁器コストが増加したことである。人員を除き、景德鎮が必要とする主な天然資源は、少なくとも明清頃からその他の地域に頼り始めた。磁器鉱石であれ燃料であれ、その他の地域から景德鎮までの長距離を運べば、磁器製造に必要な天然資源のコストは上がり、これがさらに景德鎮の磁器価格を値上がりさせることになった。これも近代の景德鎮磁器の競争力に影響した重要な要素である。

2. 本博士論文の斬新な点

総合的に見て、本博士論文には以下の斬新な点がみられる。

1. 環境史の視点から、景德鎮磁器産業に対する新たな認識を得ている。景德鎮は中国で陶磁器の都として誉れ高く、中国古代の経済上の重要都市であり、経済、社会史の研究者はその点に関心を持つことが多く、磁器貿易、磁器芸術、産業組織、民間信仰の面から豊富な研

研究成果を出している。景德鎮磁器の経済、文化的価値は非常に高く、これらについての研究は長年積み重ねられているが、卓越した研究は少ない。環境史は景德鎮磁器産業の再認識を可能にした。自然の角度から景德鎮の磁器生産過程に注目し、磁器産業における自然要素を掘り起こし、景德鎮磁器産業の発展を支える柱の一つが自然原料であることを見出した。同時に、鑑賞用磁器や実用磁器の生産の背後で自然が犠牲になっていることを人々はずっと見過ごしてきた。磁器鉱石やカオリンを採掘、採取するにあたり山の形は破壊され、地表の植物は消失し、大量の土砂が川や田畑に流れ込んだ。船で燃料を景德鎮に輸送するにあたり、それに相当する樹林が消失した。明清時期までに景德鎮周辺には禿山が連なり、燃料は更に遠方から運ばねばならなかった。大量の磁器産業ごみは年月を経て昌江を侵し、河川の水質に影響を及ぼし、昌江は塞き止められてしまった。このことは従来の研究では注目されておらず、また従来の研究視点ではこの点に触れることは難しい。

2. 景德鎮磁器産業の衰退に影響を及ぼした手がかりを新たに発見した。これまでの景德鎮磁器産業の衰退についての分析では、研究者は技術、市場、政治の面にばかり注目しており、特に景德鎮の近代における衰退に対しては、主に外国製品の衝撃と景德鎮の技術の遅れ等と分析している。しかし本論による整理の結果、自然が景德鎮磁器産業の衰退に重要な役割を果たしていたことがわかった。燃料を例にすると、景德鎮の燃料は主に松柴と槎柴に分かれるが、この2種類の燃料はかつては混ぜて使用され、松柴だけで磁器を焼くことはほとんどあるいは全くなかったが、明清以降、次第に松柴のみを使用する柴窯が多く現れた。松柴は燃焼環境が良く到達温度をさらに高くできることなどから、焼き上げた磁器の質がさらに良くなる。明清の景德鎮磁器の品質が向上し磁器産業が盛んになったことは松柴を単独で大量に使用したことと関連している。しかし松の木を生産周期はかなり長く、大量の松柴を消耗した景德鎮及び周辺の松林では十分に供給できなくなり、燃料源は徐々に遠ざかり、遠くは福建にまで至った。燃料の長距離輸送は景德鎮の燃料コストと市場リスクを増加させた。燃料価格が上昇するにつれ、近代の景德鎮磁器は国際市場での競争力を弱めていった。これが近代に景德鎮磁器産業が衰退に至った原因の一つである。

3. 既存の「環境衰退論」による環境史研究の傾向を打ち破り、新たな研究の道筋を提示している。本論では、環境史衰退論の論述は、その多くが環境史研究者の思い込みであると指摘する。環境史研究者は古代の経済生産、環境変遷を整理する際、現代の人類活動の影響をもとにして自然環境が破壊されたとするが、何を根拠にこれらを破壊と定義し、あるいは環境問題とみなすのか。基本的な史学の記述に則り、環境史の叙述を対応する歴史の場景に当てはめて、当時の人の環境「問題」に対する認識を分析するべきであると考え。本論では、

景德鎮の磁器産業が周辺の自然環境を破壊し、また燃料の燃焼が空気汚染を作り出したが、当時の人の立場に立って問題を見ると、結果は違うものになるということを具体的に示している。このように現代人の認識では環境「問題」であっても、当時の人には問題として見られていなかったことを明らかにし、いわゆる「環境衰退論」を覆している。

4. 景德鎮磁器を中心とした周囲とのつながりについて整理している。今までの地域経済研究では中心点に注目し過ぎ、点を中心とした周囲との結びつきについては見過ごされてきた。景德鎮の研究についても同様で、景德鎮を研究する際、研究者は景德鎮そのものの磁器産業の技術に注意を向けすぎ、周囲とのつながりに関してはその販売網に限られていた。本論では、景德鎮の成功の拠り所は周囲とのつながりであり、そのつながりが景德鎮の磁器産業を培ったことを明らかにしている。

5. 景德鎮磁器産業のなかに埋もれた個人に注目している。中国古代の歴史書では一般民衆の声、特に一般民衆一人ひとりの境遇や日常を知ることは難しい。多くの研究者がこうした状況を打ち破ろうと試みてきた。陳寅恪『柳如是別伝』は比較的早期の代表作品で、最近では魯西奇の『喜：一个秦吏和他的世界』がこの方面の代表作である。しかし一般の人々を掘り起こして歴史を研究することはまだ少ない。歴史学者は李鴻章、胡適、蔣介石、馮玉祥、顧頡剛等の著名人の身上により時間と精力を注ぎたがる。景德鎮の現在の研究でもこれと同様で、磁器、絵画、ギルドばかりに目を向け、人に目が届いておらず、一般の普通の陶工が一体どのような生活をしていたかははっきりしていない。本博士論文の最後の二章はもっぱら景德鎮の陶工に注目し、給料、生、老、病、死、教育、治安等の面からこれら底辺の人々の境遇を明らかにしており、極めて独創性に富んだ研究である。

このように独自性を備えた研究で景德鎮をめぐる論述を展開しているが、その研究方法は中国の古代、近代やその他における天然資源に依存する産業の研究に対しても適している。本論執筆者は環境史の視点から景德鎮磁器産業で見落とされていた歴史を明らかにすることによって、景德鎮磁器産業に対する認識を書き換えた。今後の景德鎮の歴史の記述に一石を投じるだろう。

本博士論文が利用した多くの史料は主に 3 種類にわたる。一つは正史、実録、随筆、文集、地方志等を含む伝統的な史料である。これらの史料は信憑性が高く、しかも中国史学界はこの種の史料の利用に成熟しており、厳密な識別と考え方で伝統を成しているため、この種の史料を本論では基本的に信頼して利用している。二つ目は近代の雑誌新聞である。この種の史料は状況がかなり複雑なため、筆者は非常に慎重に扱っている。この種の文献では、作者自らの体験を記したものもあれば、そうでないものもあり、両者のうち前者は信用して

もよいため、筆者は利用の過程で両者を区別しなければならないことに気づいた。雑誌上のデータは、政府のデータがあればそちらを利用した。三つ目は体験者の回想や述懐で、中でも利用が多かったのは『景德鎮文史資料』である。筆者はこれら過去を追想して記した資料を利用するときは、それ一つのみを根拠に問題を論じることは極めて少なく、雑誌や新聞で補足するか、その他の人の述懐を用いて互いの証明とし、証拠に欠ける場合は利用しなかった。

【口頭試問における主査・副査からの指摘】

口頭試問は2023年2月1日(水)午後2時00分から質疑応答を含めて3時までM406教室にてオンラインで行なわれ、呉傑華氏本人と審査委員として主査の黄英哲、副査の三好章、松岡正子の3名が参加した。試問終了後、引き続いて3時20分まで審査委員によって審査会議を行なった。試問の冒頭に、まず本人による同論文の内容説明(PPT使用)を行なったのちに質疑応答を行なった。質疑応答の中では、審査委員から主として以下の指摘があった。

- ・2020年初めから中国は新型コロナウイルスの蔓延により混乱に陥り、全国でいくつもの都市が封鎖されたため、執筆者は景德鎮で精密なフィールドワークをすることができず、主な資料は大部分を紙の文献資料に頼るしかなかった。実際に景德鎮でフィールドワークをおこなうことができれば、さらに補強してほしい。

- ・環境史の背景の理解が中国のみに偏っており、国際的視野が欠落している。中国からだけでなく、世界史の視野から環境史を見ることは絶対に必要である。

- ・景德鎮の発展とグローバリゼーション(イスラーム世界との交流、13, 14世紀の大交易時代における東南アジア、インド洋、東方貿易の結合、14, 15世紀の明王朝の「海禁」政策の影響など)との関係について、今後の研究の課題の一つとして期待している。

- ・欧米学者の中国環境史研究をもっと調べて参考するべきである。

- ・景德鎮の工房や関連業者の労働者はそれぞれ決まった地域から来た「移民」であり、彼らが属した下位の「行会」は所謂「同郷会」を思わせる。それは職場集団というだけではなく、生活に関わる諸機能(規約、互助と義務等)を有し、独特の人間関係があったのではないかと思われる。「属する集団」から個人の生活実態をみるという方法も有効かもしれない。

本論文は、以上の指摘のように多少不十分な点はあるものの、研究の発展の可能性と新鮮な研究の枠組、環境史からの景德鎮研究の新しい試みの点で評価に値する。課程博士学位請求論文として一定の水準に到達していると判断できる。口頭試問では、主査・副査による質

疑に対して適切に応答した。よって審査委員会は本論文を博士学位授与に値すると判断した。

以 上